

朗読劇 潮騒の祈り

作・演出 高橋郁子

【三人語り】

綾子 ^{あやこ} (27) 主人公	…
和江 ^{かずえ} (52) その母	…
海 ^{うみ}	綾子であり、潮騒であり、命そのものであり
	…
	…

—— 覚え書きとして ——

白濁の放出を誘うための作品があるのなら、

血の痛みを解放するための作品があってもいいではないか。

この思いを出発点として、物語を紡いだ。

月に揺さぶられ生きていかざるをえない女性の感覚を、

同性であるがゆえに振じれてしまう母と娘の愛を、

少しでも多くの人に寄り添ってもらえることを願う。

●序

語り手、登場。

深海であり、胎内をつくるところから。

三人の呼吸と、場が整うまで、潮騒を続ける。

海

ぎざああ、

ぎざああん、

綾子

ぎざああん、

ぎざああ、

和江

さあー、

ぎざああん、

●一

《九月上旬・昼》

潮騒はやがて、海辺の町の波音となって――。

綾子

もう二度と。

もう二度と戻ることはない、そう決めた場所なのに。

海

ぎざああ、

ぎざああん。

綾子

九年前、

すべてを捨てたはずなのに。

和江

さあー、

ぎざああん。

ぎざああ。

綾子

どうしてここに、

来てしまったのだろう。

照りつける太陽の下、^{した}

海

ざざああ、

ざざああん。

綾子

綾子は重い扉の前で一人、立ち尽くしていた。

和江

ざざああ、

さあー。

海

ざざああん、

ざばああん。

綾子

無人駅、シャッター通り、車の走らない海岸沿いの国道。

小さな漁港と、小さな砂浜。

真夏でも賑わうことを知らない、静まり返った町。

国道には一階を店、二階を住居とする個人商店がぼつぼつと並ぶ。

そのうちのひとつに、母が営むスナックがあった。

色あせた看板と壁を這ういくつもの罅が、築年数を物語る。

錆び付いた郵便受け。あの人の、尖った筆跡。

『永瀬和江・綾子』

指先でそっと、色あせた字をなぞる。

海

ざざああ、

ざざああん。

さあー、

綾子

期待するものなど、なにもないはずなのに。

ざらついた砂、

指のあと。

海

ざざああん、

ざざああ、

綾子

ここに来て、どつするつもりなの、私。

海

ざざああ、

おかあさん。

和江

「綾子？」

綾子

この声――。

和江

「綾子よね？」

綾子 こわばる体。そして、扉に手をつき口元を覆う。
海 こみ上げる吐き気。

和江 「大丈夫？ 気分でも悪いの？」
綾子 背後から、小走りに近づいてくる足音。

海 額にじわり、脂汗が滲む。

綾子 どうしよう。どんな顔をしよう。

「こんなとき、」どう答えたら、この人は喜ぶだろう。

潮風が、傾きかけた陽が、首筋に痛い。

海 ざざああ、ざざああん。

綾子 風に乗って迫る、香水の匂い。

和江 「ねえ綾子」

綾子 声を振り払うようにして、綾子は顔を上げた。

海 さあー。ざざああ、ざざああん。

綾子 「ただいまお母さん、元気にしてた？」

母は、買い物袋を両手に下げて立っていた。

胸元が深く開いた薄手のニットに、細身のジーンズ。

サンダルから覗く指先には、赤いペディキュア。

陽の光の下に、夜の女。

和江 「『元気にしてた？』じゃないわよ、なんなの急に。

来る前に電話くらいしたらどう？」

綾子 「ああ、ごめん」

和江 「まあいいわ。でもそこで突っ立ってなにしてたの、鍵は？」

綾子 「忘れてきちゃった」

海 嘘つき。

綾子 捨てたとは、言えなかった。

和江 本当は、鍵のことなどどうでも良かった。

東京の大学に行ったまま、向こうで就職し、

なにか理由をこじつけては、一度も帰ってこようとしなかった私の娘。

どうして今、ここにいるの。

綾子 昔、幾度となく投げかけられた眼差し。

和江 「まあいいわ、じゃ、この鍵とって」

綾子 何気ない会話のふりをして、私を見定めようとする。

また逃げ道を塞ぐの、お母さん。

どうかまだ、 気づかないで。

海 おねがい

たすけて。

和江 「ほら、ぼうつとしない。

早くドア開けてって言うてるの。これ重いんだから」

和江は右腰を突き出すと、ポケットの中に手を入れるよう促した。

綾子 「あ、うん」

綾子は手を伸ばすと、

母の体に触れないようにして、素早く指先にキーホルダーを引っ掛けた。

和江 震えている。

和江は、綾子の緊張を見逃さなかった。

海 胃液がまた、喉を上る。

綾子 奥歯を噛み締めて、無理やり呑み込んだ。

和江 「ちよっと綾子、本当に大丈夫なの？」

綾子 「うん、今開けるね」

視線を振り切って、背を向けた。

和江 青白い顔、堪えた嘔吐、スカート姿。

海　　ぎざあぁ、　　ぎざあぁん。

和江　　母親の直感は、　　疑問を確信へと変える。

綾子　　今じゃない。今じゃないの。

和江　　「綾子、　　あんたもしかして、　　妊娠してるの？」

綾子　　お願いだから、　　先回りはやめて。

海　　ぎざあぁん。　　さぁー、　　ぎざあぁ。

綾子　　目の前が突如、　　白く弾けた。

和江　　「綾子!？」

綾子　　膝の力が抜け、汗ばんだ手のひらがドアノブから滑り落ちる。

和江　　「ちよつと綾子！」

和江は買物袋を手放すと、崩れ落ちる綾子を抱きとめた。
「綾子、しっかりなさい！　綾子！」

綾子　　遠ざかる、　　母の声。　　光の底に、　　体が沈む。

海　　ぎざあぁ。　　さぁー。　　ぎざあぁ。

綾子　　大きく羽を広げた海鳥が、　　空をゆっくりと横切っていく。

海　　ぎざあぁ、　　ぎざあぁん。

綾子　　もうすぐ、　　夏が終わる――。

和江　　さぁー、　　ぎざあぁん。

綾子

ああ、そうだ。

本当は今日、赤ちゃんと、サヨナラするはずだったんだ。

海

サヨナラするはずだったんだ。

●二

《同日・夜》

海

ざざああ、　　ざざああん。

和江

ざざああん。　　ざざああ。

綾子

頬にやわらかなものが触れ、目が覚めた。

風に揺れるレースのカーテンが、頭の上を行き来していた。

月明かりに照らされた、青白い天井。

海

ざざああん。ざざああ。

綾子

夜風とともに吹き込んでくるのは、常連客の歌う歌謡曲。

サビの部分以外、どうしても半音外れてしまうしゃがれ声は、

きつと角の花屋のおじさんだ。

寝返りをうつと、小学生の頃から使い続けた学習机が目に入った。

高校時代に使っていた参考書や文房具が、そのまま置かれている。

本棚として使っていたカラーボックスも、あの日のまま。

和江　　ざばああん。　　ざざあぁ。

綾子　　まるで。

時を止めていた場所に、自分だけが歳をとって帰ってきたみたいだった。
綾子は薄いタオルケットの中で、今はまだ平坦なお腹に手をあてた。

海　　ざざああん。

ざざあぁ。

和江　　さぁー。

ざざああん。

綾子　　ここにいるのは、　あの人の赤ちゃん。

でもあの人は。　あの人は家庭を望まない。

和江　　ざざあぁ、

ざざああん。

綾子　　父親にはならない。

海　　ざばああん。

綾子　　もう、ダメなんだ。

和江　　ざざあぁ、　　ざばああん。

海　　ざざああん。　　ざざあぁ。

●三 《過去》

綾子

綾子は大学で教員免許をとったものの、

採用試験の門は狭く、望みは叶えられなかった。

自分のような思いをする子どもを、少しでも減らしたい。

子どもの逃げ場所を作れる教師になりたかった。

綾子

卒業後は学習塾で働くことを選び、

ある程度の経験を積んだら、また試験に挑むつもりでいた。

仕事に励んで三年。

ある日、先輩講師として慕っていた男に、交際を申し込まれた。

三十八歳。離婚歴のある男だった。

女性であることを嫌い、異性を拒んだ少女時代もあったが、

ひと回りも歳の離れた男の優しさは、

海

綾子

女性に生まれて良かったと思わせる力があつた。

父を知らずに育つた綾子は、男の包容力に惹かれ、心をあずけた。

海

綾子

結婚はもうこりこり。

俺はお前といられる、そのことだけで幸せなんだ。

男の口癖に、綾子は深く考えず、頷いた。

私のすべてを包んでくれたあの人。

だから私も、あの人のすべてを受け入れた。

それなのに――。

甘い時間は、二年を待たず終止符を打った。

訪れたのは、望まぬ妊娠。

海

望まぬ妊娠。

綾子

無防備に体をひらいてきた私が、バカだった。

八月中旬。

体の異変に気づいた時には、既に三カ月を迎えていた。産婦人科へ行くと、その場でエコー画像を見せられた。

黒いモニターに浮かび上がったのは、

小さなまるが二つくっついたような、白い影。

二等身の小さな体の中で心臓が、力強く鼓動を打っていた。

これが、私の赤ちゃん――。

綾子

海

内診を終え、医師と向き合ったときだった。

いまいち実感のわいてこない綾子の前に医師は、

エコーでははっきり分かりませんが、と言ってファイルを広げた。

そこには、『第八週から十一週までの赤ちゃん』と題をつけられた

説明文入りのイラストが描かれていた。

嘘だ。

綾子は目を見張った。

海

ヒトだった。

身長五センチから八センチ。

体重十五から二十五グラム。

二等身ではあるが、頭や胴だけでなく手足もはっきりとわかる、

ヒトだった。

指や脛、唇、耳もでき、更にこの頃の胎児には皮膚感覚までもあるという。

20

綾子

いるんだ。もうここに。

海

いるんだよ。もうここに。

綾子

医師は妊娠を継続する気持ちがあるかどうか聞いてきたが、すぐには答えられなかった。

次の健診までに、パートナーとよく相談するよう言われ、病院を後にした。

綾子 出すべき答えは 明らかだった。

海 答えなんて 決まってるよね。

綾子 しかし。

男に話すことは、すぐにはできなかった。

決定的な言葉を聞くのが、怖くてたまらなかった。

それだけじゃない。

ふいにわきあがる「産みたい」という衝動が、綾子を迷わせた。

海

綾子

わかっている。

あの人は、結婚を望まない。

だからといって、一人で生み育てる気もなかった。

海

経済的な理由はもちろんのこと、

二歳で父を亡くし、以来母子家庭の寂しさを痛感してきたからこそ、

無責任に産むことはできない。そんな思いだった。

墮るすのは、無責任じゃないの？

綾子

迷った末、綾子は男に事実を告げた。

男は、綾子の体を心配しながら、恐る恐る墮胎を勧めてきた。

そして綾子の決意を知ると、ほっと顔をほころばせた。

安心したせいなのか、綾子を励まそうとしたのか、男は口を滑らせた。

海

お前なら分かってくれると思っていたよ。

どんなときも、自分を大切に生きてほしい。

自分ヲ大切ニシテ生キテホシイ。

綾子

傷つけられる体。

海

奪われる命。

綾子

ああ、そうだったんだ。

海

この子は、愛し合って出来た子じゃないんだ。

綾子

この人にとっては、ただの、排泄だったんだ。

海

頬を涙が伝う。

綾子

男は、綾子が優しさに感動したのだと思いこみ、

海

満足げに微笑んで、綾子をそつと抱き寄せた。

手術は、九月初旬と決まった。

妊娠は第十一週、初期中絶が行える最後の週だった。

それを過ぎると、出産と同じ方法で胎児を産み落とし、

命を絶たねばならない。

医師の説明を聞いて、

今更ながら自分のしようとしていることが何なのか、思いしらされた。

それからの数日間。

海

気のせいか、妊婦がやけに目についた。

綾子

電車の中。

海

赤ん坊を抱いた若い母親が隣に座った。

綾子

目の前に、好奇心いっぱいキラキラとした眼差し。

海

母親の肩越しに手を伸ばしてくる、無邪気な笑顔。

綾子

「産んじゃ、ダメなのかな……」

海

思わず口に出していた。

綾子

母親が驚いてこちらを見る。

海

綾子は慌てて目を伏せた。

手術当日。

男からの電話で目が覚めた。

身内の不幸があり付き添えなくなったというその声は、
どこか芝居がかった。

もう、涙すら出ない。

綾子 ここにいるのは、私の赤ちゃん。

そうだ。

あの人が望まなくても、私が望めばいい。

理性を支えていた存在が去った今、衝動が、微かな理性をかき乱していく。

海

綾子

産みたいでも堕ろさなきゃ。

決めたんだ、もう行かなくちゃ。

おねがい

いかないで。

海

綾子

吐き気を堪え、スカートに着替えると、バッグに手を

伸ばせなかった。

海

綾子

床に膝をついたまま、両手で顔を覆った。

どうしよう。やっぱり産みたい。

ねえ、どうすればいい？

誰か助けて

おかあさん。

海

綾子

お母さん……？

それは、たったひとつの可能性だった。

いやダメだ。あそこに私の居場所なんかない。

居場所ならまた、つくればいい。

いや、甘えてはいけない。

もう決めたんだ。行こう病院へ。

綾子

海

海

やめて

いきたくない！

綾子 綾子は、迷いを振り切るように家を飛び出した。

●四 《戻って——九月上旬・夜》

和江 「で、結局どうするつもりなの」

午前零時。

和江は学習机の椅子に座り、

窓を背にベッドの上で膝を抱える綾子と向き合っていた。

海 ざざああ、 ざざああん。

綾子 「産みたい ……と想ってる」

海 わざとらしいため息が、綾子の耳を貫いた。

和江 「産んだら産みっぱなしってわけにはいかないのよ」

綾子 「わかってる」

和江 「わかってたらなんでこういうことになるの。

一度墮ろすって約束して…

それじゃ、取れるものも取れなくなるんじゃないの？」

崩れた化粧。強い香水と煙草の混じった匂い。

それなのに眼差しだけは、正しい母親を決め込んでいる。

綾子はこのちぐはぐな佇まいが、昔から嫌で仕方なかった。

「それで？ その人と別れてどうやって育てていくつもりなの」

この棘とげに、いちいち反応してはいけない。

今はこの人に頼るより他ないのだ。

海 綾子は唇を噛みしめる。

和江 「黙ってちゃわからないわよ」

綾子 「お母さんが許してくれるなら……」

海 姿勢を正し、母を見据えた。

綾子 「もし許してくれるなら、ここに帰ってきて、

お店の手伝いをしながら育てていきたい」

和江 「手伝い？」

海 その声に 思わず体が強ばる。

綾子 しまった、 選ぶ言葉を間違えた。

和江 「呆れた。手伝い程度の収入でどうにかなると思ってるの」

海 綾子は必死で次の句を探す。

綾子 「保育園に預けられるようになったら、仕事もちゃんと探すから」

和江 「それまではこの売り上げを当てにするってこと」

綾子 見透かして、 追いつめて。

海 決めつけて、 言葉を見失う。

綾子 「少しは……少しは貯金だってあるし……」

海 たまらず、うつむいた。

和江 言い淀む綾子のしぐさ、声色、目の動き。

和江 和江は娘の真意を探る。

海 また、あの目だ。

和江 「私は反対。あんたは今の状況に酔っているだけよ」

海 綾子は拳を握りしめる。

綾子 なんと言われようと、私はこの子を守るんだ。

和江 「ねえ綾子。勢いで決めても、なんにもいいことないのよ」

綾子 視線の先で母の右手が、左手の結婚指輪を撫でていた。

和江

「あんたがお腹に出来たとき、駆け落ち同然で家を飛び出したでしょう。親と縁を切っても、あんたを産みたかった。

だから今の綾子の気持ちはよくわかるの。

ただやっぱり若かったと思う。

お父さんはすぐに死んじゃうし、親元には帰れないし……」

綾子

なにかある度に聞かされてきた、母の過去。

自分に酔っているのはどっちなのか。

指先が、苛立ちを隠せず爪を弾く。

和江

「おじいちゃんおばあちゃんや親戚に会わせてあげられなくて、

かわいそうなことをしたと思うわ」

綾子

「そんなこと、今更どうでもいいじゃな……」

和江

「だから甘いって言ってるの。」

あんたを保育園に預けて働いて、あんたが小学校に上がって、

この店を譲り受けてからは、昼間はスーパー、夜はここ。

私が働き通しで、寂しかったはずよ。

同じ思いをさせることになっても、あんたは平気なの。

そんな自分本位な人が母親になれる？」

綾子

あんたに言われたくないよ。

海

思わず口をついて出そうになった。

気持ちを押し殺し、綾子は小さく息をつく。

綾子

「確かに、寂しかったこともあるよ」でもお客さんがいたじゃない。

私には、親戚のおじさんおばさんみたいに可愛がってくれるお客さんが

いたし、お店があったから、学校から帰ってくる頃にはいつもお母さんが

家にいてくれた。

それに、ここで育てていけるなら、この子にはおばあちゃんができる。

だからきつと寂しくない、寂しい思いなんかさせない」

海

わたしは、お母さんとは違う――。

綾子 胸にちらつく、あの頃の思い。

海 綾子はベッドから下りると、畳の上に手をついた。

綾子 「お母さんと一緒に暮らしたいです。ここでこの子を産んで育てたいです。許してください、おねがいます」

海 手の甲に一粒、熱い雫くせが落ちた。

綾子 それはお腹の子を守るためのものなのか、母への憤りなのか、

自分ではよくわからなかった。

和江 震える背中は、相変わらず危なっかしい。

ただ、がむしゃらに子を守ろうとする姿は、母親そのものだった。

海 「あやこね、おそらからずっとみてたの。

いるんなおんなのひとつがいたけどね、おかあさんがいちばんかわいかった。

だからすべりだいでシューツて、おかあさんのところにきたんだよ」

和江 ふいに、保育園に上がる前の綾子の言葉が、和江の脳裏よきを過る。

子育てにくじけそうになったとき、この言葉にずっと支えられてきた。

私を選んでくれたこの子と同じように、

この子のお腹に宿った子も、ひよっとしたら――。

和江は椅子から下り、綾子の前に腰を下ろした。

「わかったわ。帰ってらっしゃい」

綾子は驚いて顔を上げる。

和江 「でもね綾子、あんたはもつと強くなんなきゃダメ。

少しくらい図太くなきゃ、子どもなんて守れないんだから」

綾子 「お母さん……」

海 今はまだ、つわりという現象でしか自らの存在を伝えられない、小さな命。それでも、精一杯生きている。

綾子

綾子はそっと、お腹に手をあてた。
もう大丈夫。

安心して産まれてきていいんだよ。

海

ざざああ、　　ざざああん。

綾子

そのとき、　　潮風が吹き込んだ。

海

さあー、　　ざばああん。

和江

カーテンが大きく広がって、　綾子の背後に、たまご色の月が見えた。

●五

《秋》

綾子

綾子は、東京へ戻る前にかかりつけの産院を決め、
その足で役所へ出向いた。

渡された母子手帳。

空白のページを、新幹線の中で何度も開いては読んだ。

仕事は十月いっぱいをかけて引き継ぎを終えた。

男は、突然意見を翻した綾子にうるたえていたが、

認知と養育費はしっかりと拒んだ。

しかし、マンションを引き払うときになって、

せめてもの罪滅ぼしと、百五十万円を綾子に持たせた。

最後の最後で冷徹になりきれない、そんな男だった。

予定外の妊娠ではあったが、

海

新たな人生のきっかけを与えてくれたことに、綾子は礼を述べた。情が失せていたこともあり、別れは驚くほどさっぱりしたものだ。つわりのピークも過ぎ、安定期を迎えていたことも、心持ちに影響していたのかもしれない。

綾子

実家へ戻ると、和江は母親学級のスケジュールを調べあげていた。

和江

「昔と今じゃ、出産事情も違うんでしょ」

綾子

厳しいことを言ったわりに、綾子の体を心配し、店のカウンターに立つのは夜九時までと決め、店には空気清浄機まで準備していた。

海

この頃、毎晩のように綾子を悩ますものがあつた。眠りにつこうというときに決まって、腸の中でガスがゴロゴロと動き出すのである。

綾子

健診のとき、医師に相談してみた。

海

するとそれは、胎児が動いている証なのだと教えられた。消化器官や筋肉も発達し、もう外の音も聞こえているという。命の主張はいつの間にか、つわりから胎動へと変わっていたのだ。

綾子

胎内に初めて感じる、別の命の存在。

海

「私がお母さんだよ……って知ってるか」
声に出して話しかけるのは、なんだか照れくさかった。
綾子の中に、淡い期待が膨らんでゆく。

綾子

昔のことは忘れよう。
もしかしたら、やり直せるのかもしれない。
大丈夫。

あなたのためになら、きっと忘れられる。

あなたに会うためなら、私は頑張れる。

海

ガスによく似た感覚のうちは、その愛情を疑いもしなかった。

●六 《十一月上旬・夜》

綾子

銀杏いちょうの葉が色づき、実を落とし始めた頃、
妊娠六カ月に入った綾子のお腹は緩やかに膨らみ、
腰回りも丸みを帯びてきていた。

ある夜、店から先上がった綾子は、のんびりと湯船につかっていた。
浴槽のふちに頭を預け、天井を仰ぐ。
階下からは、いつものように常連客の歌声が響いてくる。
窓の隙間から吹き込む潮風は、
波のリズムに合わせて、浴室の湯気を巻き上げる。

海

ざざああん、　　ざざああ、　　たばあん。

綾子

そういえば、　　今日は大潮だ。

綾子は湯船の中で「軽く膝を抱え、目を閉じた。

ざばあん。

ざざああん。

ざばああん。

ざあー。

たばあん。

ざざああ。

綾子

次から次へ

押し寄せる、

波の音。

海

たばあん。

ざばあん。

ざばああん。

綾子

海が

満ちてくる。

和江

さあー。

ざざん、ざあー。

綾子

ああ、海がある。

私の中にも、小さな海がある。

海

ざばん。

たばあん。

和江

ざざああ、

ざばああん。

綾子

どこかで聞いたことがある。

海

原始の海と、羊水の成分は似ていると。

綾子

いつかテレビで見たことがある。

海

精子が卵子に出会った瞬間、受精卵に命の波が走るのを。

和江

ざざああん。

ざざああ。

綾・海

つながっている。

海と私はつながっている。

和江

ざばあん。

ざばああん。

海

さあー。

たばあん。

綾子

胎児は、三十五億年かけて進化した生命せいめいの記憶を、

たった十週で追いついてしまう。

そして毛細血管に母親の血潮を浴びて、人になってゆく。

和江 さあー、 ざざああん。

海 ざざああ、 ざざああん。

綾子 そうだ。 私も遠い昔は、小さな波から始まったんだ。

海 ざざああ。 さあー。

和江 たばあん。 ざざああん。

綾子 お母さん。 お母さん――。

海 あんな人、いつか捨ててやる。

海 あんな人、いつか捨ててやる。

綾子 お母さんはきっと、わたしが嫌いなんだ。

和江 「綾子、いつまでお風呂にいるの!? 早く出て学校行きなさい」

海 綾子は、シャワーの中で、そっと目を開けた。

海 タイルに反射した陽の光が、足下で踊る。

海 朝は嫌い。学校になんて行きたくない。

綾子 綾子は、お腹をかばってうずくまる。

綾子 母に追い立てられ、なんとか浴室までは辿り着けるものの、

綾子 いざ出ようとすると、腹痛に襲われてしまう。

綾子 こんなもの、いつまで続くの。

綾子 四年生になった綾子は、初潮を迎えたことをきっかけに、

綾子 クラスでいじめに遭っていた。

綾子 おとぎ話の延長のような性教育を受ける中、

綾子 早くに第二次性徴を迎えてしまった子どもは好奇の目にさらされる。

綾子 トイレにポーチを持ち込む者は、

綾子 子どもたちにとって、充分異質な存在だった。

綾子 ランドセルを潰され、靴を隠され、教科書を汚ひまされた。

綾子

主犯格は男子だったが、平均よりも早く訪れた初潮は同性である女子にもまだ、理解されることはなかった。

海

みんな授業で習ったはずなのに。

わたしは、ばい菌なんかじゃない。

綾子

いじめのことを、和江に相談したこともあった。

しかし――。

和江

「綾子はみんなより早く大人になる準備ができただけなの。

綾子

女の子にとっては喜ばしいことなのよ」

和江

教室の空気を、親は感じることはできない。

綾子

綾子は、的の外れな励ましを受け続けた。

和江

「逃げちゃダメ、負けたらダメよ。」

綾子

学校に行かなかったら負けを認めたことになるの。

綾子

頑張って学校に通って、友達を見返してやりなさい」

海

あんなの友だちじゃない。負けでもなんでもいい。

綾子

もう息ができないところになんかいたくない、それだけなのに。

綾子

必死で逃げ道を探す私を、あの人は許さなかった。

綾子

そして最後の出口をいつも、この言葉で塞いだ。

和江

「お母さん、綾子が馬鹿にされるの見たくないの。

綾子

ねえ、お母さんと一緒に頑張ろう？

綾子

あんただってお父さんがいないから、

綾子

お母さんがこんな仕事してるからって言われるの嫌でしょう？」

海

ねえ、お母さん、どうして勝手にわたしの気持ちを決めちゃうの。

綾子

知ってるよ、本当はお母さんが馬鹿にされたくないんだよね。

綾子

わたしが学校に行きさえすれば、お母さんは胸をはっていられるんだよね。

綾子

いじめられることよりも、母に捨てられることの方が怖かった。

海 お母さんは正しい。間違っているのはわたし。

綾子 そう自分に言い聞かせ、学校に通い続けた。

海 歯を食いしばって、涙を堪えて。

綾子 そして、現実を受け入れた。

海 きっと、わたしじゃダメなんだ。

綾子 お母さんはどんなことにもくじけない。強い子が欲しいんだ。

綾子 小学四年生にして綾子は、心を殺した。

海 もういい、あの人に守ってもらおうなんて思わない。

綾子 本当は守って欲しかった。

海 赤ちゃんに戻りたい。

綾子 赤ちゃんだったら、いつも可愛がってもらえるのに。

海 ぜんぶ、この体のせいだ。

綾子 綾子は水しぶぎの向こうに映りこんだ、薄い体の少女を睨みつける。

綾子 胸にゆるやかな丘を描いただけの、

綾子 服を着てしまえば、級友たちとなら変わらない、この体。

海 それなのに、中身だけが変わってしまった歪な体。

綾子 中学に入ると幸運なことに、いじめはなくなった。

綾子 主犯格の男子は別の中学に進み、月経が女子の日常になったからだった。

綾子 しかし、心に刻まれた傷は元に戻らない。

海 あんな人、いつか捨ててやる。

綾子 傷は次第に化膿し、

綾子 綾子は母を憎むことで、心のバランスを保つようになっていた。

和江　ざざああ。
ざざああん。
ざざああん。

綾子　綾子は、湯船の中で思いを馳せる。

私は、お母さんとは違う。

この子の気持ちをちゃんと聞いてあげよう。

私の子だけれど、私のものじゃない。

私の思い通りにしようなんて、決して思わない。

膝を抱えた胎児の姿勢で、綾子は波の音に呼吸を合わせる。

海　ざざああん。　たばあん。　ざばああん。
ざばん。　ざあー。　ざざああ。

綾子　珊瑚は満月の夜に産卵する。

人は満ち潮の時間に多く生まれ、引き潮に合わせて息を引き取るともいう。

和江　ざざああ、　ざざああん。
ざばん。　ざざああ。

綾子　私も、大潮に合わせてこの子を産むのだろうか。

和江　ざざああ、　ざあー。

海　ざばああん。　たぶん。

綾子　「え？」

海　体の内側で、鈍い動きがあった。

綾子　膨らみ始めたお腹に、そっと両手を添える。

和江

ざばああん、

ざざああ。

綾子

手のひらをくすぐる

皮膚の波。

そして。

高鳴る鼓動。

海

とうぼん。

綾子

「なに」

海

胎内の海で、なにかが大きく跳ねた。

綾子

綾子は、綾子以外の意思を、初めて内側に感じた。

和江

ざざああん、ざざああ。

綾子

怖い。

海

いや怖がることはない。

これは赤ちゃんだ。赤ちゃんが動いているんだ。

綾子

怖い、私じゃない。

海

大きくなったんだ、ちゃんと成長してるんだ。

綾子

私が、お母さんよ。

怖いはずない。私の子だ。

綾子

いや

いやいや。怖い、怖いよ。

海

これは喜ばしいこと。嬉しいはず嬉しいはず。

綾子

今、私の中で動いてる。

わからないわからないわからない、でも今！

海

どうして!? どうして喜べないの？

綾子

間違っている。わかる。間違っているのは私。

海

でも怖い、誰か助けて、助けて、助けて！

綾子

間違っているのは私、間違っているのは私。

海 私を見て、おかあさん。
綾子 「いやあああああっ！」

和江 大音量のカラオケが響く店内で、和江は水割りを作る手を止めた。
この声は、お風呂場から？
異変に気づいた客たちが、早く行けと視線で促す。
和江はヒールを脱ぎ捨て、階段を駆け上がる。

綾子 二階の扉を開け、浴室を目指す。
「助けて！ お母さん助けてよ！」

和江 「綾子？」
脱衣所のサッシを開ける。
海 曇りガラスの向こうに、揺れる影。

和江 和江は浴室の扉を開け放つ。
立ち込める湯気が一気に体を包んだ。
通り抜けた湯気の手先、開けた視界にあつたもの、それは。

綾・海 タイル張りの濡れた床の上で、
自らの腹を掴んで這いつくばる、綾子の姿だった。

和江 まるでそれは、
膨らんだ腹を懸命に引き剥がそうとしているようだった。
「どうしたの綾子！」
和江は綾子を抱き起こそうと膝をつく。
綾子は視界に母の姿を捕らえると、腕を伸ばしてしがみついた。

綾子 「怖い、助けて！」

和江 綾子の指先が、二の腕にギリギリと食い込む。

綾子 「あ、赤ちゃんが動いたの！」

和江 「怖い、怖いよ、どうしようお母さん、助けて」

和江は耳を疑った。

なぜ泣くことがある。なぜ恐れることがある。

赤ん坊の成長を喜ぶのが母親ではないか。

「あんた……なに言ってるの？」

綾子 「助けてお母さん！ 怖い怖い怖い！ 墮ろさなきや、

早く墮ろさなきや、私が死んじゃうよ！ 助けて！」

海 お母さん、 私を見て 捨てないで。

和江 「綾子！」

私は綾子の濡れた肩を掴み、体から引き離れた。

綾子 「怖いよ…… 怖い…… 助けてよ」

海 捨てないで、 おねがい ころさないで。

和江 覚悟を決め、手のひらに力を入れた。

綾子 「お母さん、助け……」

和江 「しっかりなさい！ 馬鹿なこと言うんじゃないの！

あんたが産みたいって言ったんでしょが！」

綾子 熱い衝撃が、左の頬を走った。

和江の腕を掴んでいた力が、みるみるうちに抜けていく。

無意識にお腹に手をやると、

海 胎児は沈黙していた。

和江 「深呼吸して」

綾子 静かに従う。

お母さんは正しい。

間違っているのは、いつも私。

いい子にしないから、お母さんは私を助けてくれない。

お母さんの望む強い子に、いつまで経ってもなれない私。

どう言えばお母さん、あなたは楽になる？

海

和江 「綾子、あなたなにが……」

綾子 「もう大丈夫……」

海 その目はもう、母を見てはいなかった。

綾子 「少しあったまってから出るね」

頼ってはいけない。

元々この人に、私の気持ちなんて分かりっこない。

和江 「綾子……」

綾子 「もう平気。お店に戻って」

和江 「平気って言っても……」

綾子 「ちゃんと産むから」

湯船につかる綾子の背中に、腑に落ちないものを感じながら、

和江は静かに扉を閉めた。

階段を下りながら、私は右手へ視線を落とした。

うっすらと赤くなった手のひら。微かに痺れが残っている。

自分の子どもが怖い？

私が綾子をお腹に宿していた頃、そんなことは微塵も感じなかった。

和江は綾子の台詞をなぞってみる。

「墮ろさなきや、私が死んじゃう……？」

呟いて、首を振った。無理だ。

綾子

わからない。
わからない。

どうして怖いのか。私の子どもなのに。
あの時なぜ、墮ろしたいなどと口走ったのだろうか。
産みたくて産みたくて、ここへ帰ってきたはずなのに。
胎児が母親の身体を蝕むわけがない。
なのに。

私は、自分の存在が脅かされるような気がした。

胎内にいる子どもが、母を失ったら生きることなんてできない。
そんなこと分かっているのに。

産みたい。 会いたい。 抱きしめたい。

海

生まれたい。 会いたい。 抱きしめられたい。

綾子

それなのに。怖い。

綾子は湯船の中で、自らを抱き締める。
考えていても仕方ない。迷うこともない。

私はお母さんに教えてもらいながら、この子を育てていくんだ。
自分が出した答えではないか。

昔のことは忘れるんだ。

私自身がちゃんとした母親にならなければ。

私が不安がっていたら、この子に悪影響を及ぼすかもしれない。
母親らしくあるう。強い母親になるう。

怖いはずがない。大丈夫、大丈夫。

海

呪文のように言い聞かせ数日、恐怖感はいつのまにか消えていた。
それは胎動に慣れたからなのか、狂気の引き金を知らないだけなのか、
答えはまだ、なにも見えていなかった。

●七 《十二月上旬》

綾子 空は高くなり、空気が澄み渡る十二月。

綾子は妊娠七カ月を迎えた。

お腹のふくらみも、服によっては目立つようになっていた。

海 健診で見せられるエコー画像の胎児は、目覚ましい成長を遂げていた。

身長約三十七センチ。

体重約六百グラム。

顔立ちのはっきりし、指しゃぶりや身体の向きを頻繁に変えるなど、活発な様子を見せていた。

胎動も日を増すごとに、力強くなっていく。

そして、あの日のことがまるで嘘のように、

綾子は落ち着いた日々を過ごしていた。

和江

ある日の夕方。

和江が店でグラスを磨いていると、

階段をゆっくりと下りる綾子の足音が聞こえてきた。

綾子

「年賀状出してくる。あとちょっと散歩」

ダウンコートを羽織り、カウンターの前を横切る。

和江

「腰痛いんですよ。今日は休んでなさい」

綾子

「でも運動不足もよくないし。」

あと今日やたら動くから、ちょっと落ち着かなくて

そう言っって、重みの増したお腹を撫でた。

和江

「一時間くらいで帰ってきてよ」

綾子

「うん。あ、ついでもに買ってきて欲しいものとかある？」

和江

「ないわ。ああ、あと海岸はやめときなさいよ、もうすぐ満潮だから」

綾子

「分かってるって」

綾子はマフラーを巻くと、重い扉を押し開けた。

和江 「うわ、寒い！ ってきます」
「いってらっしゃい」

海 ざざああ。 ざざああん。

和江 ざざああん、 さばああん。

綾子 冬の夜は早い。

五時を過ぎたばかりなのに、もう陽は落ちていた。

国道沿いを歩いて、郵便ポストへ向かう。

和江 ざざああ。 ざばああん。

海 潮風が防波堤を越えて、 綾子の髪を巻きあげる。

綾子 顔を埋めたマフラー―白い息。ほのかに温まる、頬。

和江 ざばああん。ざざああ。

綾子 ふと。視線を感じて海を向いた。

水平線の上に浮かぶ、橙色。

まんまる、お月さま。

お月さまが見てる。

綾子 なんだろう、目がはなせない。

「へんなの」

わざと声に出して、振り切ろうとした。

が、胸騒ぎが内側にぴたりと張り付いて剥がれない。

早く年賀状出さなくちゃ。

綾子は歩き出す。

海 ざびあぁ。 ざばあん。 ざぁー。
和江 びびあぁん。 たばあん。 ざばん。

綾子 月の視線を一瞥して、
海 一步、 また一步と 引き寄せられる。
迷わず、 海へと向かう。

和江 ざばあん。 びびあぁん。 びびあぁ。
綾子 期待するものなど、 何も無いはずなのに。

海 たばあん。 ざばあん。
綾子 いるんだ、 もうここに。

海 ざびあぁん。 びばあん。 たばあん。
和江 ざばん。 ざぁー。 ざばあん。

綾子 次から次へと波が 押し寄せる。
海 潮が 満ちてゆく。

和江 ざばあん。 たばん。
海 ざばん。 びびあぁ。

綾子 「やだ私」
砂に足が沈んで初めて、自分が海岸に下りていたことに気づいた。
目の前に広がるのは、吸い込まれそうな深い闇。
そして、波間に揺らめく一筋の光。

海 月が、手招く。

和江　　ざばああん。ざあー。　　ざざああん。

綾子　産みたい。　　堕ろさなきゃ。

海　　うまれたい。　　ころさないで。

綾子　一人、夜の砂浜。

不思議と怖くはなかった。

和江　　ざざああ。　　ざざああん。

綾子　私は　　お母さんとは違う。

和江　　さあー。　　ざざああん。

綾子　心地よい、　　波の音。

海　　ひたひたと、波打ち際が迫る。

和江　　ざばああん。　　ざざああん。

綾子　間違っているのは、　　いつも私。

海　　重なる波が風を起こし、肌を刺す。

綾子　闇に耳を傾ける。

和江　　ざざああん。　　ざばああん。

綾子　あんな人、　　いつか捨ててやる。

海　　何も見えない。　　濁りのない闇。

海　　何もない。

綾子　全てを覆いつくし、全てを忘れさせてくれそうな、安らかな闇。
私の汚い心までも、全て飲み込んでくれるに違いない。

海
ざざああ。ざばああん。

綾子
お母さん。

お母さん。

和江
ふいに呼ばれた気がして、洗い物の手を止めた。

顔を上げると、時計の針はもう七時を回っていた。

寄り道をしたとしても、さすがに遅すぎる。

和江は、手についた泡を洗い流した。

泡が滑り落ち、ゆっくりとシンクを這って、排水溝に向かっていく。

ふとそれが、風呂場に這いつくばっていた綾子の姿と重なった。

あの時。

私は大事なことを見落としはしなかったか。

和江は濡れた手のまま、携帯電話を手にとった。

しかし、綾子が出る様子はなかった。

どうして気づかないの。

鳴り続ける呼び出し音が、胸騒ぎを煽る。^{あお}

和江は椅子にかけていたコートを掴むと、外へ飛び出した。

冷気が、体を包む。

見上げれば、満月。

海
お月さまはきれい。

和江
歩き出そうとして、足が止まる。

あれは綾子が小学校に上がる前、砂浜で一緒にお月見をした時のこと。

昔、聞き流した言葉が今なぜ。

だって、ずっとこっちを見てるんだもん。

和江
言われてみれば、綾子の言うとおりだ。

月は声高に存在を主張したりはしない。
夜空に身を潜^{ひそ}め、しかし視線だけはぴたりとこちらに合わせている。
何か。何かがひっかかる。
満月。

そして大潮。

海 「ちよっと待って」

和江は今閉めたばかりの鍵を開け、店へ飛び込んだ。

壁に張られたカレンダーにかじりつき、指先で日付と月齢をさかのぼる。

「どうということなの」

海 綾子が風呂場で錯乱し、腹を引き剥がそうとしたあの夜も。

和江 三ヶ月前、突然帰って来た日も。

大潮。

海 そして満月。

これは単なる偶然か。

和江

偶然だ。

この一ヶ月綾子は落ち着いている。

心の揺れを見せることはあっても、それは妊婦によくある程度のものだ。

今は何事もなかったように過ごしている。

いや、でも。

月齢に合わせていればそのサイクルは必然なのだ。

そんな馬鹿な。

和江は弾かれるように走り出した。

海

ざざああ。

ざざああん。

綾子

いい子じゃないから、

お母さんは私を助けてくれない。

海

ざばああん。

ざざああ。

綾子

お母さんの望む強い子に、

いつまで経ってもなれない私。

海 ざざああ。 ざざああん。
和江 きっと あの子は海だ。

分かる、理屈ではない。母だから、女だから分かるのだ。ただ、この真つ暗な海岸で綾子を見つけられるだろうか。海岸沿いの遊歩道を走りながら、和江は思いを巡らせる。あの夜。

錯乱してまで助けを乞うた娘に、私はなにをした？

和江は手のひらを握る。

頬ほほを打たれ、綾子は平静を取り戻した。

しかしそれは、感情の整理を無理につけさせたことにはならないか。

感情を抑えた子ども。

私が感情を抑えさせた子ども。

甘えない子ども。

海 和江

和江

私が甘えさせなかった子ども。

一人親だから、水商売だからといって決して馬鹿にされないように。悪意に負けないような強い心を持つように。

仕事でどんなに疲れていても、

教育だけはおろそかにしないように頑張ってきた。ずっと。

それが。綾子から子どもらしさを奪ったのか。

海

ざざああ。

たばあん。

和江

防波堤に並ぶ、
街灯の明かり。

海

それはまるで、光と闇を隔てる結界のようだった。

闇と化した海の中、
月から伸びる、
光の道。

ざざああ。

ざばああん。

和江

その中に、綾子。

和江は息を呑む。

海

ざざあぁ。　ざざあぁん。

綾子

ばしゃ。　ばしゃ。ばしゃ。

和江

「待ちなさい、綾子！」

砂に足を取られながら、綾子へと走る。

海

ざばん。たばぁん。　ざざあぁ。

たすけて。

綾子

凍てつく波が

綾子の足首に纏わりつく。痛い。

和江

綾子はためらうことなく、歩みを進める。

「綾子！ やめなさい！」

海

ざざあぁ。ざざあぁん。

綾子

海。全てここから始まったのだ。

海

私を捨てないで。

綾子

身を任せてしまえばいい。

答えはこの波の中にある。

海

お母さん！

綾子

波は、もう膝上まで来ていた。

海

ざざあぁん。　ざざあぁ。

綾子

冷たさも痛みも越えて、脚は痺れを感じていた。

和江

「綾子！ お願い戻って！ 誰か、誰か来て！」

海

真冬の夜の海に、他の人間がいるはずがなかった。

悲鳴は綾子の耳に微かに届いた後、波音に掻き消された。

和江

ざざああ。

綾子

怖くない。

海

こわい！

和江

ざばああん。

さあー。

綾子

真っ暗なこの闇に 溶けてしまおう。

海

わたしは

お母さんのモノじゃない！

和江

ざざああ。

ざざああん。

綾子

最初から。

最初からやりなおすんだ。

海

助けて。

助けてお母さん！

和江

遠ざかる背中。

綾子は、光の道を月に向かって歩いていくようだった。

和江は美しい光景に目を奪われる。

ねえ綾子、その先になにがあるの。

海

助けてお母さん！

和江

和江は我に返った。

だが、海の中の綾子は何も言わず、背を向けたままだ。

綾子

助けて、お母さん！

和江

聞こえる。これは確かに綾子の声だ。

和江は意を固めて海へ入った。

つま先から全身に冷気が貫く。

綾子
気持ちばかりが綾子を追い、
体は波と寒さに邪魔されて、綾子に辿りつけない。
波はもう、綾子の腰までを呑みこんでいた。

海
ぐるん。とうぽん。

羊水の海で胎児は泳ぐ。

月の引力は、眠っている胎児までも呼び起こす。

和江

大潮。真冬の海。

これ以上進んだらお腹の子が危ない。

早く綾子連れて、浜へ戻らなければ。

和江は必死に波を割って歩いた。

綾子、綾子、綾子。

ただ一心に娘を想い、母は歩む。そして――。

「綾子！」

和江は綾子の腕を掴んだ。

「放して！」

振りほどこうと身体をねじる。

放すものか。

もう一方の手で、更に綾子の腕を引き寄せた。

「やだやだやだやだ！ 放してよ！」

腫いっばいに涙を溜め全身で抵抗する姿は、まるで幼い子どもだ。

「お母さんなんか大っ嫌い！」

「嫌いでも何でもいいわ！ だけど私が嫌いだからって、

あんたが海に入って何になるの！ お腹の子と一緒に死ぬ気なの!？」

「違う！」

綾子は拳を水面に叩きつけた。

和江

「違うわい！」

あなたは子どもを殺そうとしてるのと同じじゃないの！」

綾子

「違う違う違う！ お母さんなんかに分からないよ！」

海

言葉でこそ抵抗し続けるものの、

体力を消耗している綾子は、和江の力には逆らえず、

もみ合いながら少しずつ浜へと近づいていった。

和江

泣き喚く綾子を片腕に抱え、波を掻き分け岸へと進む。

そして、海面がようやく足首まで下がった。

海

ざばああん。ざざあ。

和江

波が引いたその瞬間に、

和江は腰に力を入れて、一気に綾子を砂浜へ引きずり出す。

綾子

足がもつれ、二人とも砂浜に倒れこんだ。

和江

濡れた体に、冷えた砂がまとわりつく。

綾子

綾子は両腕を砂につくや否や、湿った砂を握りしめ、和江に投げつけた。

和江

「何するの」

海

綾子は砂が入り込んだ爪で、自らの腹を挿んでいた。

綾子

「助けてくれないお母さんなんていらない」

和江

和江は、耳を疑った。

綾子

「あんなに学校に行きたくないって言ったのに。

私がひどい目に遭ってもお母さんは平気なんだよね。

私より周りの目が大事。強く正しく生きることが大事。

強く生きられない私なんか嫌いなんだよね」

和江

「いい加減にしてよ、いつの話よ！ 私がいつほったらかしにした？

店のことも後にして学校に行つて先生と話して……

あんだだつて頑張つたじゃないの。黙つて学校行つてたじゃないの。

何なのよ今更……」

言葉とは裏腹に、和江は気持ちの張りが失せていくのを感じていた。

海 ざざああ。 ざざああん。

和江 そうか。 やはり私が間違っていたのか。

九年ぶりに姿を現したあの日。

私のポケットから鍵を受け取る指が震えていたのは、
母親に触れることに慣れていないからだ。

それは、私がこの子を充分に抱きしめてこなかったからではないか。

海 ざざああ。 ざざああん。

和江 潮風が、二人の間を通り抜けていく。

綾子 「私、許さない。絶対にお母さんを許さないから」

お腹を抱え、奥深くにあった思いを絞り出した。

和江 は大きく頷き、綾子の手を解く。
ほど

綾子 咄嗟に手を払い、顔を上げた。

険しさの消えた母の瞳がこちらを見ている。

和江 「許さなくていい」

今ようやく、綾子の想いに辿りつけた。

綾子 ただ、ありのまま愛して欲しい。

海 ただ、ありのまま愛して欲しい。

綾子 愛されない自分を否定し、

愛してくれない母親を憎み、生きてきた時の流れに、
自らが母体になったことで、混乱は生まれた。

墮るさなきや、私が死んじゃう。

憎むべき母親を自分の中に作り上げた。

海 母を否定する綾子は胎児と同化する。

綾子 胎児が、母を蝕む。
露わにできない膿うみんだ感情が、心に終わりのない渦を作ってしまった。
それでもまだ理性でその渦を抑えていた。

海 しかし満月が、海が、誕生を叫ぶ命の波が、
綾子 綾子の理性を奪い去ったのだ。

そして今日。

海へ入り、自分を消せば、

和江 憎い母が消えると思ったに違いない。

海 ざざああ。ざざああん。

和江 「綾子」

和江はそっと、綾子の頬に手を伸ばした。

綾子 肩を縮め、その指を避ける。

和江 綾子の首に腕を回し、力強く自分の体に引き寄せる。

綾子 「お母さんが悪かった。あんたは間違ってる」

和江の肩に顎を乗せ、綾子は身を硬くする。

濡れた服が肌に触れ、その次に母の体温を感じた。

和江 「ごめんね綾子。一人で寂しかったね」

綾子 ほうっと、喉につかえていた息が抜ける。

海 ざざああ、ざざああん。

綾子 「お母さん……？」

和江 「やり直したいなんて調子のいい事は言わない。

でも、これからはちゃんとあんたを守っていくから。頑張るから」

綾子 母の心に「どんな動きがあったかは知らない。

だが、綾子がずっと待ち望んでいた母の姿がそこにあった。」

和江

「綾子を赤ちゃんみたいに可愛がることは、もうできないけど、
あなたはあなたがされたかったように、お腹の子を育てたらいい」

海

とうぼん。

体の中で、胎児が跳ねる。

綾子

「あ……」

和江

「どうした？」

海

母から身を離して、お腹に手を当てる。

和江

「動いたの？」

海

頷いた拍子に、大粒の涙が溢れ出した。

綾子

ぐちゃぐちゃになって私、

この子をどこへ連れて行こうとしてたんだろう。

もっとしっかりしなきゃいけないかったのに。

和江

「良かった綾子、無事で良かったじゃない」

綾子

「ねえ、お母さん。私みたいな弱っちい人間でいいのかな。

この子は生まれるかと思ってくれるかな」

和江

「なに言ってるの、弱くたっていいじゃない。

弱くたってなんだって、

あんたがお母さんであることに変わりないでしょう」

綾子

「でも……でも……」

和江

「ねえ綾子」

綾子

「ん？」

和江

「私みたいな親でも、綾子は生まれてきて良かったと思う？」

綾子

お腹を抱いたまま、額を母の胸に擦り付けた。

綾・和

生きることは決して楽ではない。

足掻いて足掻いてここまで生きてきた。

海 お母さんも、たった一人で頑張ってきたんだ。

和江 「綾子、あなたはそのままで充分いい子よ」

綾子 後頭部に感じる、暖かい手のひら。

この人の娘でよかった。初めてそう思えた。

そして綾子は力いっぱい、和江の首にしがみついた。

「お母さん、お母さん、お母さん……」

和江 「桜が咲く頃は、あんたがお母さんなのよ」

海 ぎざあぁ、 ぎざあぁん。 ざばあぁん。

和江 ぎざあぁん。 さぁー、 ぎざあぁ。

海 潮騒が響く満月の夜。

綾子 母の腕の中で、綾子は再び産声を上げた。

— 幕 —

※本原稿の無断複製・複写・転載はかたくお断りいたします。

朗読キネマ 登録商標第 6241074 号
言葉の楽譜 登録商標第 6232812 号

「言葉の楽譜」の奏で方

■原則

- ・句読点、棒線はリズム作りのために存在している。

■ルール

- ・読点「、」及び、句点「。」は休止符。

- ・棒線は、前の語と区切らず続ける（句読点よりも優先される）。

【例】 「今日は、いい天気」

「きょうはいいいてんき」と間をあけず、押すように発声する。

- ・「＝」は、紙面が足りず改行せざるを得なかった印。

表現は行をまたいで続いているので注意すること。

重奏の際、次の語頭を置く位置に「→」が連動している場合もある。

朗読キネマ

潮騒の祈り

二〇一七年七月十七日

初版発行

著者

高橋郁子

発行

idenshil95

本作のデジタル化を含む、
無断転載・複写・上演・放送を固く禁じます。